



中高生とともに差別と闘う

『着地点・通過点』

吉成タダシ



平和の詩「生きる」

昨年六月二十三日、沖繩慰霊の日。糸満市にある平和祈念公園で行われた沖繩全戦没者追悼式。そこで、中学三年生相良倫子さんが、自作の平和の詩、「生きる」を読みあげました。その夜、何気なく寝転んだまま、その動画に行き着いたのですが、進んでいくうちに体は起きあがり、背筋は伸び、全身に力が漲り、画面を凝視してしまいました。

原稿を見ていない彼女の眼は、参会者を見ている。見ている人すべてを見ている。親しい友を、家族を見ている。過去を、未来を見ている。自分自身を見ている。その姿は、なりました女優のようであり、ありのままの自分自身のようでした。鳥肌は立ち、体が、心が震えました。驚きなどというのではなく、驚愕の七分間でした。

「これを子どもたちにつけたらいい！」

理屈ではなく、直感的にそう感じました。十二月に予定されている沖繩修学旅行に向けての平和学習教材として。

次の日、朝刊の記事のコピーをとり、先生方の机上にそっと置きましました。感動と提案を伝えるためです。自イスに座り、改めてコピーを読んでいると、一人の先生が配布物を持って来ました。

「あつ」

見るとそれは、別紙の朝刊の同じ記事でした。私が手にしていたコピー

がその先生の目にもとまり、「あつ」。二人の目が合い、何も言わずに苦笑してしまいました。そして、「すこかったですよええ」。

平和学習と人権学習

十一月十五日、第四回学年全体人権学習を直前に控えたある日、大島青松園へハンセン病問題の研修に行ったメンバーが集まってもらい、一つのくわだてを提案しました。

「平和学習をしているけど、これまで学習してきた人権学習や、みんなが取り組んだハンセン病問題との接点を考え、学年のみんなに語りかけてみてはどうだろうか。必ず接点はある。みんなの生の声を、体温を、直接感じてもらえる格好の機会ではないだろうか」

平和学習の授業を見ることがあります。しかししたい場合、平和学習に特化してしまい、それまで取り組んできたであろう人権学習との結びつきがよく見えないことがあります。実にもったいない。本来平和学習と人権学習は両輪であり、互いに欠くことのできない存在のはずです。ですから今回行う学年全体の人権学習でも、その関連性について子どもたちに気づかせ、捉えさせたかったのです。

平和の詩「生きる」と、人権問題、ハンセン病問題が、どのように融合し授業で展開されるのか、またそれを聞いた子どもたちがどんな受けとめをするのか、一つのチャレンジで

した。

着地点・通過点

授業当日、平和の詩「生きる」を通して戦争や平和について語り合うなかで、小説劇「ナツノオト」でハンセン病回復者を演じた日さんが手を挙げ、学年全体に語りかけました。

「私は生徒会役員として文化祭でハンセン病に関する劇をして、実際に大島青松園というハンセン病療養所にも行ってきました。元ハンセン病患者の方々が、差別によって家族と離され、その後の人生も奪われてしまったことを学びました。それが今回学習した、戦争で多くの人の命と人生が奪われていったことと重なり、戦争は現代の人権問題ともつながっていると思いました。だから、今の日本では戦争は終わっているけれど、まだ本当の平和な世界ではないと思つたので、本当の平和を考えて生きる必要があると思つました」

彼女の発言に呼応するかのようにつき、他のメンバーが続けて発言していきます。さて、学年全体にどのように響いたのか――。

授業後の感想をいくつか。「ハンセン病回復者から話を聞くということが、あと何年かすればできなくなる……というのを聞いて、今のうちに体験者の方からたくさんお話を聞いておきたいと思つきました。小さい頃に、おばあちゃんに戦争中の頃の「物」(手紙?)を見せてもら

た記憶があるので、もう一度見せてもらえるように頼んでみようと思つます」

「原爆や戦争によって被害を受けた方たちは、未来を奪われたのだと思つます。それと共通して、ハンセン病療養所にいる方たちも、未来を奪われました。私たちは、将来や未来があることをうれしく思つています。同時に、未来を奪われた人の分まで、私たちは強く、生きていきたいと思つました。「生きる」の詩にあるように、かけがえのない今を大切にしたいです。そのために、時間や命を他の人に使つたり、考えたりしていきたくないです。Mさんが言っていたように、自分たちが行動に移していくまでには時間がかかるのかもしれないけれど、目標に向かうまでの階段を、一段ずつでも上がっていきたくないです」

一人が投げかけた小石は小さいけれど、小石は二つ、三つとなり、四方八方に波紋のように広がり、静かに体育館に反響していくようでした。

小説劇「ナツノオト」から始まったハンセン病問題の取り組み。一瞬(文化祭の劇)だけ、一部(生徒会役員)だけで終わることなく、深まり(現地研修)と広がり(学年全体人権学習での平和学習との融合)が感じられる着地点となりました。けれど、これで終わるものではありません。この流れは、きっとこれからも、どこまでも続いていくのです。